

# 海を渡った若者たち

## 薩摩藩英国留学生

### 【関連年表】

一八五七年 島津斉彬がフランスへ留学生派遣を計画するものの、翌年の斉彬死去で中止となる。

一八六二年 生麦事件

一八六三年 薩英戦争

一八六四年 薩摩藩開成所設立。

一八六五年 薩摩藩英国留学生派遣。

時は江戸時代、一八六五年（元治二年）三月、薩摩の若き武士達が、羽島（現在のいちき串木野市羽島）の港から海を見つめていました。

欧米の進んだ文明を学ぶためにイギリスへ渡る留学生として、薩摩藩開成所から選ばれた若者達です。しかし、この時の日本は鎖国の時代、幕府は、各藩が外国へ留学生を送ることを認めていませんでした。幕府の許可を得ない今回の留学は、鎖国を破る重罪となり、彼らは幕府の追及をこまかすために全員が名前を変え、イギリスに向かうのです。見つければ死罪。留学生達にとって、命をかけた大きな決断でした。

【いちき串木野市羽島沖】



### 【薩摩藩開成所】

薩摩藩の若い武士達が、西洋の学問を学んだ学校。一年前に開校された幕府の開成所に続き、薩摩藩も一八六四年（元治元年）に開成所を開設した。英語・オランダ語のほか、砲術・兵法・天文・地理・数学・測量・造船などを学ぶ授業などが行われた。

【歌の意味】

(春になり)花だけでなくすべて  
のものが春の様子になった羽島で、  
最近は更に(出航が)とても楽しみ  
になってきている今の気持ちだ。

【扶持米】

江戸時代に米で支払われた給料。

【石】

体積を表す単位。一石は、人が一  
年間で食べるおよその米の量で、約  
一八〇リットル。

留学生の一人、市来勘十郎(変名は松村淳蔵)は、

出航に際し、次の歌を詠んでいます。

花ならぬ 影も匂ひて 羽島浦

更にゆかしき 今日にもあるかな

扶持米わずか五石余りという下級武士だった彼は、

洋学を学ぶことで身を立てようと考えており、今回の留  
学に大きな希望を持って参加していました。彼にとって  
今回の留学は、学んだ英語を実践する機会であり、今後  
の薩摩藩や日本で活躍する大きなチャンスです。「これ  
からは刀で勝負をする時代ではない。学問で勝負する時  
代になる。」そう信じた彼は、羽島についてすぐ、武士  
の象徴である鬘を落として、出航の時を待っていました。

一方、複雑な思いで海を眺めている者もいました。彼

【代表的薩摩藩英国留学生  
五代友厚】

既に上海への渡航経験があった  
五代友厚は、留学生達のまとめ役  
だけではなく、藩からの任務も与  
えられていた。

それは、紡績機器や武器・艦艇  
の買い付け、貿易商社設立の交渉  
役であり、友厚は、航路上の様々  
な国で、工場・鉱山の見学や要人  
との面談を行っている。

結果的には契約に至らなかった  
が、鉱山の開発、鉄道の敷設、工  
場の開設、電信の設置などにつ  
いてヨーロッパの会社との交渉を行  
い、他の留学生より一足早く、半  
年ほどで帰国している。



【歌の意味】

君主のために（命令に従って）、  
秘密に出航することは分かるが、（意  
に反して、外国に出かけなければな  
らない）この出発を、どのようにし  
て耐えればいいのかだろうか。

【畠山義成の歌碑】



（いちき串木野市）

【攘夷思想と夷狄】

江戸末期に広がった、外国人を排  
斥しようとする思想。外国人を夷狄  
（未開で野蛮な外国人）と呼んだ。

の名前は畠山丈之助（後の義成、変名は杉浦弘蔵）。

彼も出航に際し、次の歌を詠んでいます。

君か為 忍ぶ船路と しりながら

けふのわかれを いかて忍ひん

彼は、島津家の上級家臣である畠山家の一人として、

武士の誇りを重んじ、洋学を学びながらも、攘夷思想

を捨ててはいませんでした。彼は最初、留学を断ります。

武士として、「夷狄の国へ行くことはできない。」と考

えたのです。

「なぜ自分は、夷狄の国に出かけるのか。なぜ自分が、

イギリスに行かねばならないのか。」

彼は悩みます。しかし、藩主の命令に背くことはで

きず、この留学に参加していました。

「進んだ文明を学ぶことが必要だということは分かる。

だが、夷狄から学ぶなど、武士としてあるまじき行動で

【代表的薩摩藩英国留学生】  
寺島宗則

島津斉彬の侍医を務め、集成館  
事業では、技術書の翻訳や写真術  
・ガス灯・電信機の研究にも携わ  
る。

医師、通訳、外交と多才に活躍  
した人物であり、イギリス留学に  
当たっては、五代友厚らとともに  
留学生達のまとめ役を担った。

帰国後は、明治新政府で、電信  
施設の東京・横浜間の建設や電信  
の国有化などに取り組み、近代通  
信網整備の先駆となった。また、  
外務卿として、江戸幕府が結ん  
だ不平等条約の改正に取り組んだ。

【島津斉彬】

薩摩藩第十一代藩主。幼少期か  
ら洋学に興味を持ち、藩主就任後、  
藩の富国強兵に努め、集成館事  
業を興した。  
安政の大獄の前年、鹿児島で急  
病死する。

【薩摩藩留學生の銅像】  
鹿児島中央駅前の銅像「若き薩摩の群像」は、薩摩藩出身の留學生達がモデルとなっている。



【松村淳蔵】



はないか。」

何度も何度も自問自答しますが、満足のいく答えは見つからないまま、今日の出航の時を迎えようとしていました。

やがて、長崎の商人・グラバーが手配した船が、羽島に到着しました。

しかし、船に乗り込んですぐに問題が起こります。船長が「全員が刀を預けないと出航しない。」と告げたのです。畠山義成をはじめ何人が刀を渡すことをためらい、留學生たちは激論を交わします。

松村淳蔵は言います。

「日本を出れば、既に外国だ。当然、外国の決まりに従わなければならない。」

それに対し、畠山は主張します。

【トーマス・グラバー】

スコットランド出身の貿易商。上海で活躍し、開港二年後の長崎に「グラバー商会」を設立した。現在、その邸宅跡「グラバー園」は、長崎県の観光名所となっている。

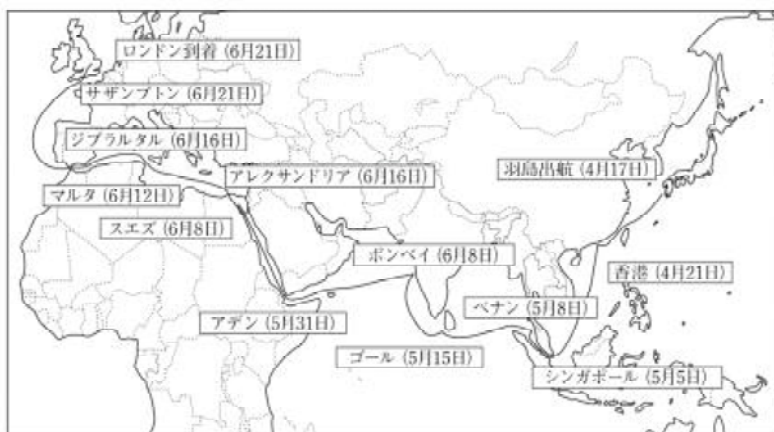
薩摩藩に対してもグラバーは優先的に協力し、この薩摩藩英国留學生の支援を行っている。

【畠山義成】



【イギリスまでの航路】

日付はすべて新暦。



「我らは武士である。よって、武士の魂である刀を手放すわけにはいかない。」

長い時間話し合った結果、「留学を成し遂げることが主君の命である。その命に従い、イギリスに向かうことが我々の任務である。」という結論に達した留学生達は、全員が刀を預けることに同意しました。

日本を離れ、香港・シンガポール・インド・エジプト・地中海を経由してイギリスを目指す、二か月もの長い長い航海の始まりです。

最初の目的地は香港。その香港に到着した一行は、目を見張ります。夜の街を昼間のように照らす無数のガス灯、整然と整備されたレンガ敷きの道、公園、洋風の大きな建物、次々と到着し、出航していく多くの黒船など、すべて日本にないものばかりです。

【代表的薩摩藩英国留学生】  
もりありのり  
森有礼

留学生の一員として、イギリスとアメリカで学ぶ。

帰国後、明治政府の下で、教育制度や社会制度を学ぶために再びアメリカに渡る。

イギリス公使を五年間務めた後、初代文部大臣となり、学校令を公布して、学校制度の改革を行った。

また、私財を投じて商法講習所（現在の一橋大学）を設立するなど、日本が近代国家となるための人材の育成に努めた。

【薩摩藩の命運をかけた留学】

羽島からザンプトン（イギリス）までの航海には、今の金額で、一人あたり約二千七百万円が投じられており、費用の面でも薩摩藩の命運をかけた留学であった。

航海中、留学生達は、まず船酔いに苦しみ、西洋風の食事に慣れることができなかったようだ。

松村淳蔵は「味があるのは橙と米だけで、豚と牛はどつにもまずいと、日記に愚痴をこぼしている。」

イギリスの軍艦も見学しました。二年前の薩英戦争で、

鹿児島を攻撃した軍艦です。遠くから見ていた軍艦の内  
部は、最先端の技術の集まりでした。香港での五日間の  
滞在中、欧米の進んだ文明を目の当たりにした留学生達  
は、日本が欧米から大きく遅れていることを実感します。

「欧米は、想像以上に進んだ技術を持っている。この進  
んだ技術を、必ず日本に伝えなければならない。」

留学生達は、決意を新たに勉強に励みました。

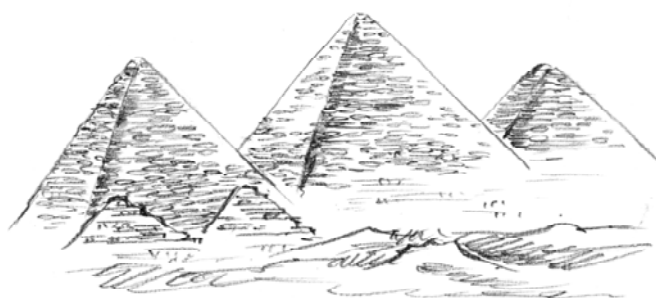
二か月の航海中、留学生達は毎日二時間以上、英語を  
学びました。先生は通訳の堀孝之、同行するグラバー商  
会の英国人ホーム、そして船の乗組員達です。時には何  
時間も勉強することもあり、外国人乗客にも積極的に話  
しかけ、様々な情報を手に入れていきました。

香港、シンガポールと航海は進み、ボンベイ（現在の

【留学生、ピラミッドを見る】

航海中の各地で、留学生は多くの体験をした。

砂漠地帯ではラクダを細かく観察したり、エジプトではピラミッドも見学している。





【植民地支配の現実】

香港やシンガポールをはじめ、留学生達が寄港した地は、当時すべてイギリスの植民地であり、イギリス人により支配され、イギリス風の街が造られていた。

【長州藩の留学生】

同じ頃、長州藩もイギリスに留学生を送っていた。五人の留学生のうち既に二人は帰国していたが、三人が残り、物理学などを学んでいた。まだ薩長同盟は結ばれていなかったが、留学生同士は盛んに交流を行っていたという。

インドのムンバイに留学生達は到着します。ここでも

彼らは欧米文化の発展を目の当たりにしますが、何より

留学生達に衝撃を与えたのは、欧米人の優雅な暮らしと、

それに対して、植民地として支配された現地の人々の、

あまりにも貧しい暮らしとの違いでした。

「このまま日本が欧米文明に遅れ続けると、日本もこれらの植民地と同じ運命になってしまう。」

留学生達は、これから強まっていくであろう欧米の

脅威と、その欧米と並ぶだけの実力を日本が持つ必要性を痛感したのです。

建設工事中のスエズ運河も見学し、更に、スエズから

アレクサンドリアまでの陸路の移動では、鉄道も体験し

ました。松村は「その速きこと疾風の如し」と日記に残

しています。電信機も体験しました。「列車に乗り込む

時に、到着先のレストランに何時頃何人到着と連絡する

【代表的薩摩藩英国留学生】

長沢鼎

留学当時十三才だった長沢は、大学に入学できず、スコットランドにあったグラバーの実家で生活し、地元の中学校で学んでいる。

明治維新後、藩からの送金が多くなり、農場の拡大やワイン工場の開設などに力を入れ、「ぶどう王」と呼ばれた。留学生の中で唯一、長沢鼎は、日本に帰国しなかった。



【慶応年間薩藩々費洋行者写真】  
 ロンドン到着後、全員分の洋服・靴をあつらえ、英語の勉強の合間に撮影された。(左から)

後列 畠山義成、高見弥一、村橋直衛、東郷愛之進、名越平馬  
 前列 森有礼、市来勘十郎(松村淳蔵)、中村博愛



(鹿児島県立図書館所蔵)

と、既に食事の準備ができていた。」と、その利用法などにも触れています。すべてが珍しく、すべてに驚きながら目的地のロンドンに到着した留学生達は、薩摩のため、そして日本のために新しい欧米の文明を学ぶという自分達の役割に、改めて強い使命感を持ち、イギリスでの生活を始めました。

留学生達は、ロンドン大学で学びましたが、夏休みの期間を利用し、まずは語学の習得に取り組みました。また、ロンドンの町や造船所などの工場や、鉱山の見学にも出かけています。

秋になり大学の授業が始まると、留学生達は化学や数学、天文学など、それぞれの分野に分かれ、大学で猛烈に勉強を始めました。やがてイギリスでの留学期間が終わると、日本へ帰る者や、ヨーロッパに残り更に留学を

【慶応年間薩藩々費洋行者写真】  
 新納刑部、五代友厚、堀孝之は別行動を取り写真に映っていない。(左から)

後列 田中静州、町田申四郎、鮫島尚信、寺島宗則、吉田清成  
 前列 町田清次郎、町田民部、磯永彦輔

撮影の数日後、磯永彦輔(長沢鼎)は中学校入学のため、ロンドンを離れて、スコットランドに向かった。



(鹿児島県立図書館所蔵)



【イギリスの新聞】

ロンドン滞在中、ベッドフォードの鉄工所と農園を訪れた様子が地元新聞で紹介された。

一八六五年八月一日

ベッドフォードタイムズ

「先週の土曜日、多数の日本人が農業と工業の知識を得るためベッドフォードを訪れた。日本人は農業用の蒸気機関耕運機とその使用方法に興味を持ち、細かなところまで質問し、複雑な説明も理解していた。農園では実際に器用な運転を行い、使用状況について質問していた。」

ベッドフォード市長との夕食の様子も紹介されている。

続ける者など、それぞれの道を進み、日本に帰った留学生達は、明治維新後の政府の中心となって活躍することになります。

一方、松村淳蔵や畠山義成ら六人は、更に学問を続けるためアメリカに渡りました。松村淳蔵はアメリカの海軍士官学校に入学して優秀な成績を収め、日本人として初の卒業生となります。帰国後は日本海軍に所属し、海軍の充実、特に士官の教育に携わりました。

畠山義成は、教育制度について学んでいましたが、その後アメリカを訪れた岩倉使節団に加わり、外国との交渉を担当するという重責を担いました。帰国後は日本政府の一員として高等教育の充実に取り組み、東京開成学校（現在の東京大学）の初代学長に就任しています。

西郷隆盛・大久保利通など、明治維新では多くの薩摩

【代表的薩摩藩留学生】

鮫島尚信

留学生の一員として、イギリスとアメリカで学ぶ。

帰国後、明治政府の下で、フランス公使等を務めた。

また、「外国交法案内」を著し、外交官の育成にも取り組んだ。

【岩倉使節団】

一八七一年（明治四年）に明治政府が欧米に派遣した使節団で、岩倉具視が全權大使、木戸孝允、大久保利通らが副使に任命されていた。派遣の主な目的は、当時の海外の進んだ政治経済の実状把握と、江戸幕府が結んだ不平等条約の改正である。

【その後の薩摩藩】

薩摩藩はこの英国留学生に続き、ヨーロッパやアメリカにも留学生を派遣した。

軍事・科学・教育などを学ぶ目的で送られた留学生は、明治時代の殖産興業・富国強兵政策に大きな役割を果たした。

藩出身者が活躍しました。彼らの努力で生まれた明治政府の中心となり、新しい時代をつくり上げていったのも、若き薩摩藩の留学生達だったのです。

【代表的薩摩藩留学生】

吉田清成

留学生の一員として、イギリスとアメリカで学ぶ。

帰国後、明治政府の下でアメリカ公使を務め、寺島宗則外務卿、井上馨外務卿らとともに、不平等条約の改正に取り組んだ。

【考えてみよう】

留学後、それぞれの人生を歩んでいった留学生達から、あなたは何を感じるだろうか。